米子市埋蔵文化財センターたより

第４９号　　２０２３年６月

伯耆町　小町越城野原（こまちこしきのはら）第１１遺跡　－横穴式石室を検出－

令和４年１１月から調査を実施しています小町越城野原第１１遺跡では、西から東へのびる丘陵で横穴式石室１基、石棺３基、石蓋土壙墓１基、竪穴建物跡１棟、段状遺構４基、竪穴状遺構７基を検出しました。

横穴式石室１

丘陵先端部の南側斜面の中腹に位置する横穴式石室１は、等高線に直交するように主軸をとり、南に開口しています。規模は長さ1.9m、幅0.6m、高さ0.6mの小型の石室です。奥壁には野球のホームベース状の大型の１枚の平石を立て、西側の側壁は横長の大きな１枚の平石の上に厚めの板状の石を１枚のせて壁としています。一方、東側の側壁は２つの横長の平石を並べた上に板状の石を複数枚積み上げて築かれており、両側壁で構築方法が異なっています。さらに、天井石として板状の石が架けられていたと考えられます。

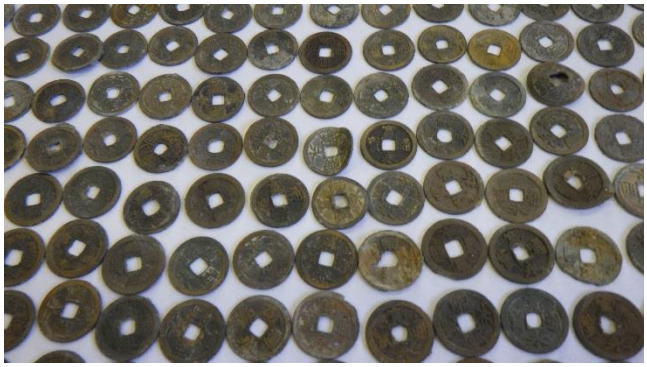
床面には、上面が平坦な石が敷き詰められ、両側の壁際の敷石の隙間の部分に須恵器の坏身が伏せた状態で埋め込まれており、入口付近では、頸の長い長頸壺が横転した状態で出土しています。この石室は、出土した土器から７世紀後半に築かれたものと考えられます。なお、石室の北側には円形に周溝が巡り、直径６ｍほどの円墳と考えられます。

越敷山麓には数多くの古墳が築かれ、古墳群を形成していますが、これらは古墳時代前期後半から造営が始まり、中期に最盛期を迎え、後期前半まで連綿と古墳が造営されています。後期後半には一旦途絶え、終末期に再び横穴式石室を持った古墳が単独でつくられています。（高橋）

発　掘　調　査　情　報

－　富益町から発見された古銭について　－

令和５年５月のとある日、市内で行っていた水道工事中に古銭が大量に出土したと連絡がありました。その数なんと 1,598 枚、そのほとんどが寛永通宝でした。早速現地に駆けつけると、歩道に深さ 6m の立坑を掘り、さらに横に水を流しながら掘り進めるサンドポンプによる掘削を行っていました。このため、正確な出土地点は分かりませんでしたが、富益駐在所付近から出土したと推測されました。



発見された古銭

銭の内訳は、中国銭が 25 枚で、残りは全て寛永通宝でした。寛永通宝は、古寛永と文銭(ぶんせん)の 2 種類のみで、元禄期以降に鋳造された新寛永は含まれていませんでした。こうした状況から、これらの銭は 17 世紀後半頃に埋められたと思われます。

しかし、この年代には大きな問題をはらんでいます。それは、富益村の開村時期とされる宝永 5(1708)年よりも時期が遡ること。その当時は、一面に砂が広がる原野だったと推測されます。なぜここに大量の銭を埋める必要があったのか、大きな謎が残ります。

幕末に編纂された地誌『伯耆志』には、富益村の西に御番所跡があったという謎の記述がありますが、今回発見された古銭は、この番所と関りのある遺物なのでしょうか。（佐伯）

整　理　室　た　よ　り

－根雨原土手下タ遺跡出土の縄文土器の調査指導－

整理室では、令和４年度に発掘調査を実施した根雨原土手下タ遺跡から出土した遺物の基礎整理作業を行っています。

出土した土器の大半は縄文土器で、中期後葉の土器も僅かに見られますが、後期の磨消縄文土器と晩期の突帯文土器が主体です。

来年度に報告書を作成するため、縄文土器に詳しい青谷かみじち史跡公園準備室の濱田竜彦氏に来ていただき、時期や整理方法などについて指導していただきました。（高橋）

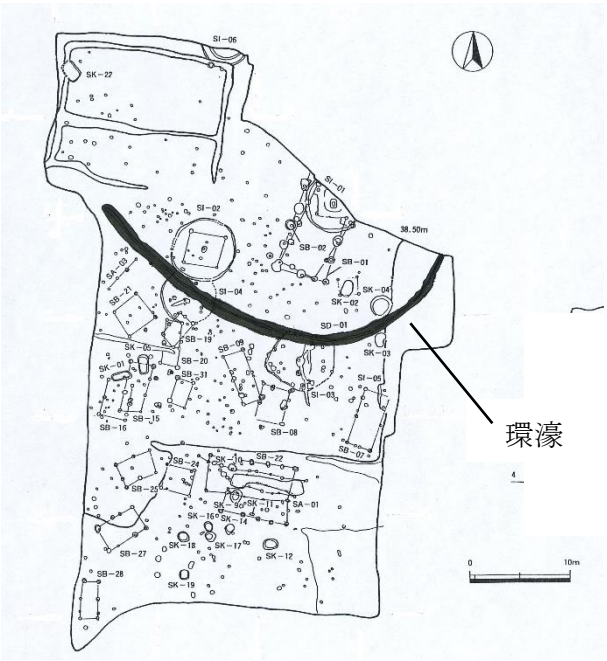
縄文土器の調査指導風景

遺跡シリーズ　天王原遺跡　（てんのうばらいせき）

天王原遺跡は、南部町朝金、市山、金田に所在し、西側を小松谷川、東側を朝鍋川に削られ、南北に長い舌状となった標高35～45mの河岸段丘上にあります。

遺跡は、土地改良総合整備事業に伴って平成３～４年度に会見町教育委員会（現南部町教育委員会）によって発掘調査が行われました。

調査の結果、縄文時代から近世にいたる複合遺跡であることが明らかとなりました。特に弥生時代前期後葉には、環濠と考えられる溝状遺構が検出されています。環濠の周辺では、環濠以外にこの時期の遺構は確認されておらず、環濠内から出土している土器の量も少ないです。また、環濠から離れた地点にこの時期の遺構が存在し、環濠とは別の地点に居住域等の存在がうかがわれることから、環濠は非居住域に伴うものであった可能性があります。



天王原遺跡環濠図
（『天王原遺跡発掘調査報告書』1993 より）

周辺では、諸木遺跡、宮尾遺跡でも環濠が見つかっており、この地は県下でも有数の環濠を伴う集落が集中している地域といえます。（高橋）

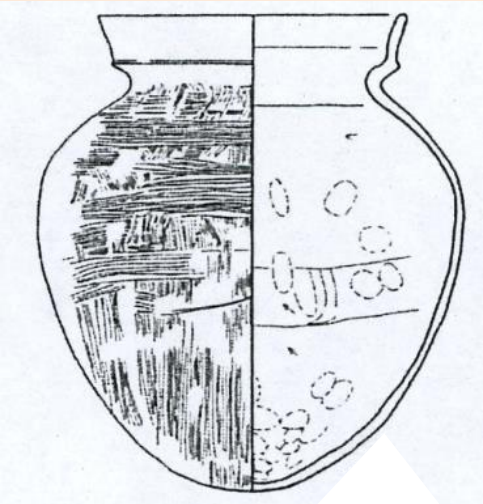
コラム　　発掘された遺物　　－古墳時代前期の土器－

古墳時代前期は、およそ千七百年前から千六百年前と考えられています。

前期前葉の土器は、壺・甕は寸詰まりの倒卵形を呈し、底部は完全に丸底化します。また、口縁の立ち上がりが徐々に退化傾向を示すようになり、立ち上がりが短くなる傾向があります。

前期中葉の土器は、壺・甕の立ち上がりがさらに短くなり、器壁が厚くなる傾向が顕著になり、さらに退化が進みます。体部は球形を呈します。

前期後葉の土器は、壺・甕の退化が進み、器壁が厚くなり、外面調整はヨコハケが主流となります。体部が球形と長胴化したものが共存します。（高橋）



前期の土器（新鳥取県史より）

センター・資料館日誌

４月 11 日（火）・12 日（水）
韓国の研究者が尾高城跡出土の陶磁器の調査で来館。

４月 25 日（火）島根県立古代出雲歴史博物館の中川学芸員が外来系遺物と漆塗り須恵器の調査で来館。

４月 27 日（木）尚徳小学校遠足、ラリーポイントとトイレ休憩で来館。

４月 28 日（金）米子工業高校、米子南高校が遠足で来館。

５月１日（月）　五千石小学校遠足、ラリーポイントとトイレ・昼食休憩で来館。

５月 18 日（木）境港市職員が佐々木謙資料の調査で来館。

５月 22 日（月）鳥取大学高田教授と島根大学岩本准教授が普段寺古墳出土資料の調査で来館。

５月 24 日（水）～ 福市考古資料館企画展１「米子城跡の最新成果と今後の史跡整備」を開催。

５月 25 日（木）八雲立つ風土記の丘資料館の西村学芸員が弥生土器の資料調査で来館。

５月 27 日（土）ＵＡゼンセン中国ブロックに勾玉づくりの出前講座を実施。

５月 28 日（日）米子市児童文化センター主催「米子城を知ろう！」で米子城跡のガイドを実施。

６月３日（土）　彼岸花の里づくりプロジェクト実行委員会との連携事業「彼岸花の球根の植栽」を実施。

６月８日（木）　出雲弥生の森博物館の坂本学芸員が青木遺跡出土の広口壺の調査で来館。

６月 23 日（金）青谷上寺地遺跡史跡公園準備室の濱田氏が縄文土器の指導で来館。

６月 25 日（日）第１回史跡ガイドウォーク「石州府古墳群」を開催。

６月 28 日（水）京都大学院生の二村氏が車輪石の調査で来館。

６月 28 日（水）～30 日（金）
米子南高校３名がインターンシップで来館。

編 集 後 記

今年は例年より早く梅雨に入りました。アジサイが咲き、アジサイにしとしとと小雨が降る風景は風情がありますが、太平洋側は台風や梅雨前線により大変な被害が出ています。これ以上被害が出ないよう願うばかりです。

発行日　令和５年６月３０日
発行者　米子市埋蔵文化財センター
指定管理者（一財）米子市文化財団
電　話　０８５９－２６－０４５５
Ｅメール　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp